

# 「環世界」論を導入し、世界を理解する新しい視座を提示

南力ナラ地域の「ブータ祭祀」を描く、優れた民族誌

川野美砂子

石井美保 著

## 環世界の人類学

南インドにおける野生・近代・神霊祭祀  
2・28刊 A5判526頁 本体5000円  
京都大学学術出版会



本書は、南インド・カルナタカ州沿岸部に位置する、南力ナラと呼ばれる地域に住む人々に関する優れた民族誌であると同時に、それを通して、越えて、人間の生とこの世界を理解するための新しい視座を提示する研究である。中心に描かれるのは、古くからこの地域に広く行われてきた「ブータ祭祀」と呼ばれる神霊祭祀である。祭祀の対象であるブータ（神霊）の多くは、非業の死を遂げた人間や、山野に棲む危険な野生動物の霊であるとされ、憑依によってその姿を顕し、人々に託宣を与える。

呪術・宗教的実践、なかでもこうした憑依儀礼は人類学の重要な研究対象の一つであり、ここには1980年代以降、民族誌を目指して「環世界」

近代へのオルタナティブとして、あるいは近代化に直面した人々の抵抗として意味づけられる研究や、非西欧社会における人々の生を独自の存在論として記述する研究が成果をあげてきた。これに対して著者は、人類学者が非西欧社会で実際に出逢うのは、近代合理性に根ざした欧米世界とは根本的に異なる別種の世界などではないと問題提起を行う。そうではなくて人々は、近代合理性と、それは異質の複数の論理や価値や存在様式をそれぞれの仕方でも引き受け、他者や事物との関係性を調整し、再編しながら、自らの生のあり方を絶えず創り出しているのである、と。そして人々こうした生を記述する民族誌を目指して「環世界」

近代へのオルタナティブとして、あるいは近代化に直面した人々の抵抗として意味づけられる研究や、非西欧社会における人々の生を独自の存在論として記述する研究が成果をあげてきた。これに対して著者は、人類学者が非西欧社会で実際に出逢うのは、近代合理性に根ざした欧米世界とは根本的に異なる別種の世界などではないと問題提起を行う。そうではなくて人々は、近代合理性と、それは異質の複数の論理や価値や存在様式をそれぞれの仕方でも引き受け、他者や事物との関係性を調整し、再編しながら、自らの生のあり方を絶えず創り出しているのである、と。そして人々こうした生を記述する民族誌を目指して「環世界」

を主題とする議論の検討を行う。『環世界』は、よく知られるように生物学者ユクスキュールによって提起された概念である。この概念によって彼は、それぞれの生きものの存在様式と不可分なものとして現れる、固有の世界のありようを表現した。ユクスキュールの提示したアイデアは多くの分野に影響を与えてきたが、本書

では、環世界という概念を受け継ぎ、生きものと環世界との関係をめぐって考察を動的に発展させたヴァイツェッカーのゲシュタルトクライス論を参照しながら、南力ナラの神霊祭祀を中心とする世界を描き出している。ゲシュタルトクライス論において生物の基本的な属性として理解されるパトフ（存在の受動性）と、転機において顕在化する生物の生のパトフ的側面の概念は、憑依儀礼の新しい理解を可能にし、人間の生とその世界の根源的理解を変更する。それが本書において、憑依儀礼を近代合理性と相容れない非西欧世界の独特の慣行だとする理解や、人類学の占有領域から解放された力となつてい

南力ナラでは、神霊の力（シヨーカー）と「マールヤ」と呼ばれている。著者はシヨーカーの領域を「顕在的なもの」の位相として、マールヤの領域を「潜在的なもの」の位相として捉え、「人間にとって不可知の領域を満たす力が、神霊という異形の存在者のかたちをとって刹那的に現出することを通して、人々はマールヤの領域と交流し、その深みに向かって働きかけることができる」という。

本書の主要部分では、人々の生とその環世界との関係性が、人間と人間ならざるものでもある存在者たちのやりとりと、相異なる複数の力——近代なるものの秩序と力、そして野生⇄神霊の領域とその力——の絡み合いとせめぎ合いの過程の中に描かれる。南力ナラの村落社会は植民地期以降、寺社管理制度の整備、母系制の近代法化、土地改革の施行をはじめとする近代法制度の普及と展開を通して大きな変容を遂げてきた。さらに近年、大規模開発によって農地や山野の破壊と村落社会の解体がもたらされている。著者は、こうした「近代化」の過程における人々の試行錯誤の中で、神霊の力に満たされた野生の領域との関係性が、行為や意思決定を方向づける重要な位置を占めてきた事例を分析している。例えば大規模開発という転機に際して、神霊祭祀は、人々が身近な土地と自然、野生の領域との関係性を維持し、更新して

いくための役割を果たしてきた。また新たに建設された経済特区の工業プラント社会に生きる人々は、開発現場における危険な事故などを契機として、土地の深部を満たす野生⇄神霊のシヨーカーに気づき、その力と人工的な諸力との関係を調停するために儀礼という手段を講じてきたという。

本書の「環世界」論を導入した存在論的概念装置は、南アジアの社会的・歴史的分析にこれまでとは異なる別の深層を加えたといえよう。評者には大変魅力的で可能性に満ちたものを感じる。

（東海大学海洋学部教授）